

島根県玉湯町鳥ヶ崎遺跡発見の後期旧石器

竹広文明¹⁾

The Late Palaeolithic stone artifact found at Torigasaki site, Tamayu Town, Shimane Prefecture.

Fumiaki Takehiro¹⁾

Abstract: Torigasaki site is located at the south shore of Lake Shinji, Tamayu Town, Shimane Prefecture. Lake Shinji was formed during post-glacial sea level changes, and in the Palaeolithic period this area was a wide valley descending to the west. This site is considered to be located on the terrace overseeing the valley to the north in the Palaeolithic period. The sample found at this time is a pointed-form lithic (kakusuijyo-sekki), made from basalt, which belongs to the Late Palaeolithic. It is proved by this find that the area around Torigasaki was a place of human activities in the Palaeolithic period.

Key words: basalt, Late Palaeolithic, pointed-form lithic (kakusuijyo-sekki), Torigasaki site.

はじめに

鳥ヶ崎遺跡は、出雲産前期旧石器の新たな代名詞として、近年注目をあつめている。鳥ヶ崎遺跡は、前期旧石器の遺跡として小野忠熙が紹介した(小野, 1977)のち、10年以上ほとんど学界でとりあげられることがなかったが、松沢亜生らの一連の活動(松沢, 1991, 1992a, 1992b, 1993a, 1993b; 片岡, 1991)によりようやく脚光を浴びることとなった。これについては、稲田孝司の批判(稲田, 1992)があるが、これは石器認定に関わるものというより、研究史の取り扱いをめぐってのものである^{註1)}。

筆者が鳥ヶ崎遺跡を訪れたのは、1993年4月11日が島根大学に赴任して以後では最初であり、丹羽野裕氏、湯村 功氏の案内で現地を訪れた。その後、4月29日に両氏をふくめ絹川一徳氏、富樫孝志氏らとともに現地を訪れた。この際、湖岸で玉髄、瑪瑙製

資料を採集し、まだ資料の採集できることを知ったため、定型的な玉髄、瑪瑙製石器の採集をもくろんで、遺跡へ休日を利用して訪れるようになった。今回とりあげる資料は、こうした活動のなかで得られたものである。

鳥ヶ崎遺跡の立地と採集資料の産状

鳥ヶ崎遺跡は、宍道湖南岸の玉湯町鳥ヶ崎に所在する(図1)。鳥ヶ崎は、湖に段丘がはりだして崎状になっており、遺跡はこの一帯である。特に玉髄、瑪瑙製資料が多く採集されているのは、段丘下の平坦地および湖岸部である。なお、1992年度には玉湯町教育委員会が発掘調査をおこなっている。

今回採集した資料も、湖岸で採集したものであり、鳥ヶ崎Ⅱ区^{註2)}と呼ばれる地点の東端部である(図2)。採集した所は、ちょうど波打ち際であり、この周囲にはこぶし大の礫がかなりみとめられた(図版1)。1993年6月27日採集。

宍道湖は、現在では最大水深5.9mと比較的浅く、な

¹⁾ 島根大学汽水域研究センター
Research Center for Coastal Lagoon Environments, Shimane University, Matsue 690, Japan

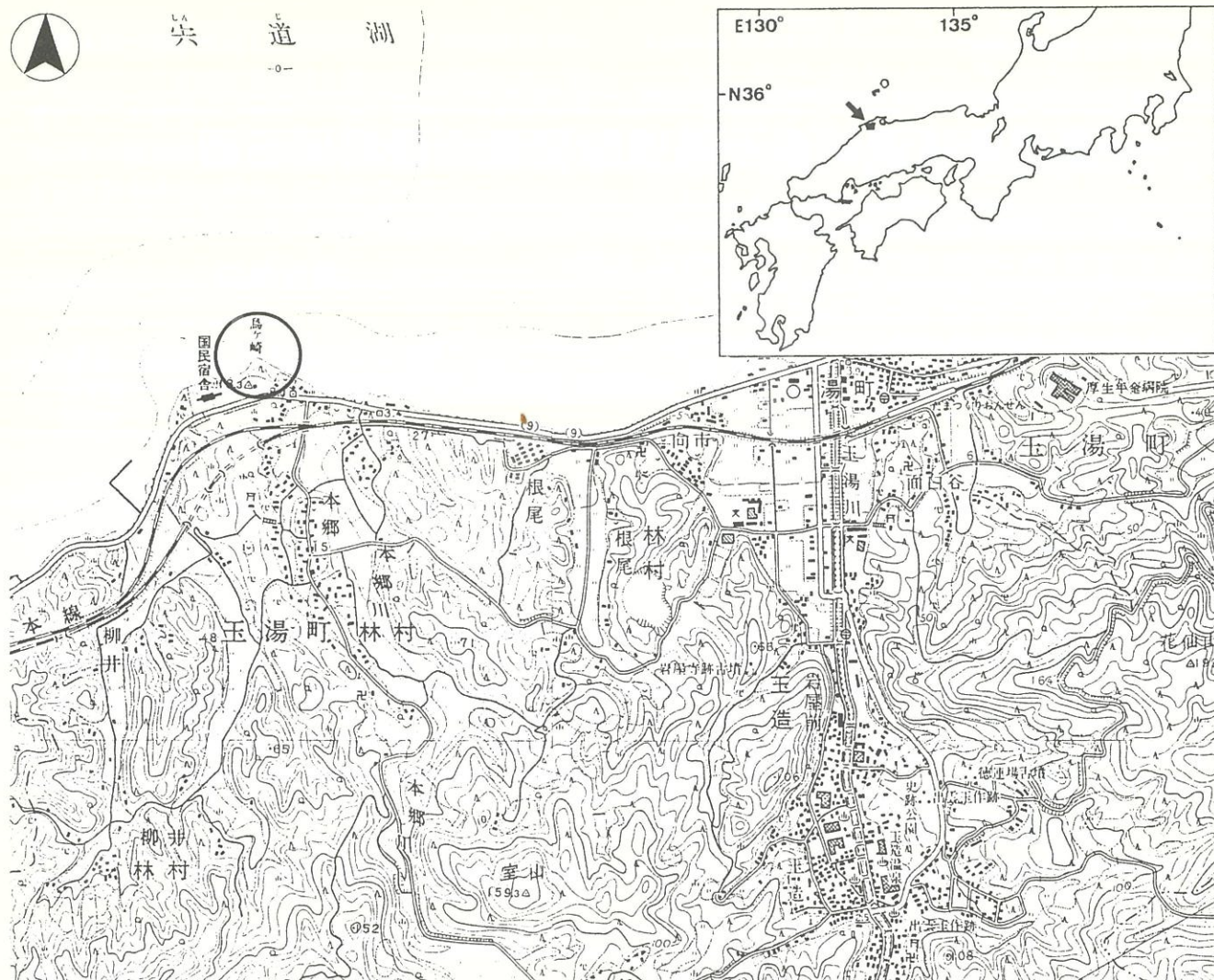


図1. 鳥ヶ崎遺跡周辺地形図 (1/25,000地形図「松江」, 「秋鹿」, 「玉造」および「宍道」による)
Fig.1 Topographical map around Torigasaki site

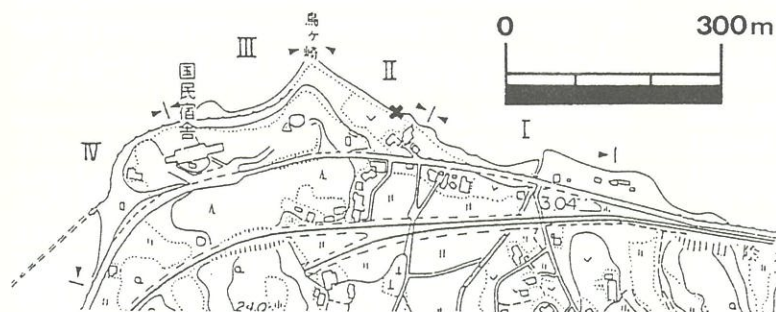


図2. 鳥ヶ崎遺跡全体図
(松沢, 1992による. ×印が採集地点)
Fig.2 Map of Torigasaki site

だらかな地形を呈しているが、これは、後氷期以降の海面変動やかつて西流していた斐伊川が江戸時代初頭以降東流したのに伴う堆積作用によるものである^{註3)}。旧石器時代においては、現在の宍道湖の地域は、西に向かってしだいに深くなる谷が刻まれていたことが、ボーリング調査で明らかになっており、完新統基底面の地形復元もおこなわれてきている(大西・松田, 1985; 大西1987)。また、近年はボーリング調査とあわせて、宍道湖を縦横にはしる測線を設定し湖底堆積層の音響探査をおこなって、よりこまかな完新統基底面の地形復元が可能となっており、

深度5~15mに埋没平坦面があり、この平坦面の各所にV字谷状の削り込みのあることがわかっている(図3)(三梨・徳岡編, 1988; 後藤・中海宍道湖自然史研究会, 1988; 徳岡・大西・高安ほか, 1990)。ちなみにこれらの地形面の上は、中海層などの完新統堆積物でバックされており、基本的に後世の地形改変はないようである。

これらの成果および筆者の現地踏査によると、鳥ヶ崎の周辺では、(1)標高10~20mの段丘面、(2)標高0m前後の平坦面、(3)水深5~15mの埋没平坦面があることになる。(1)は乃木段丘であり(大西, 1983)、(3)は

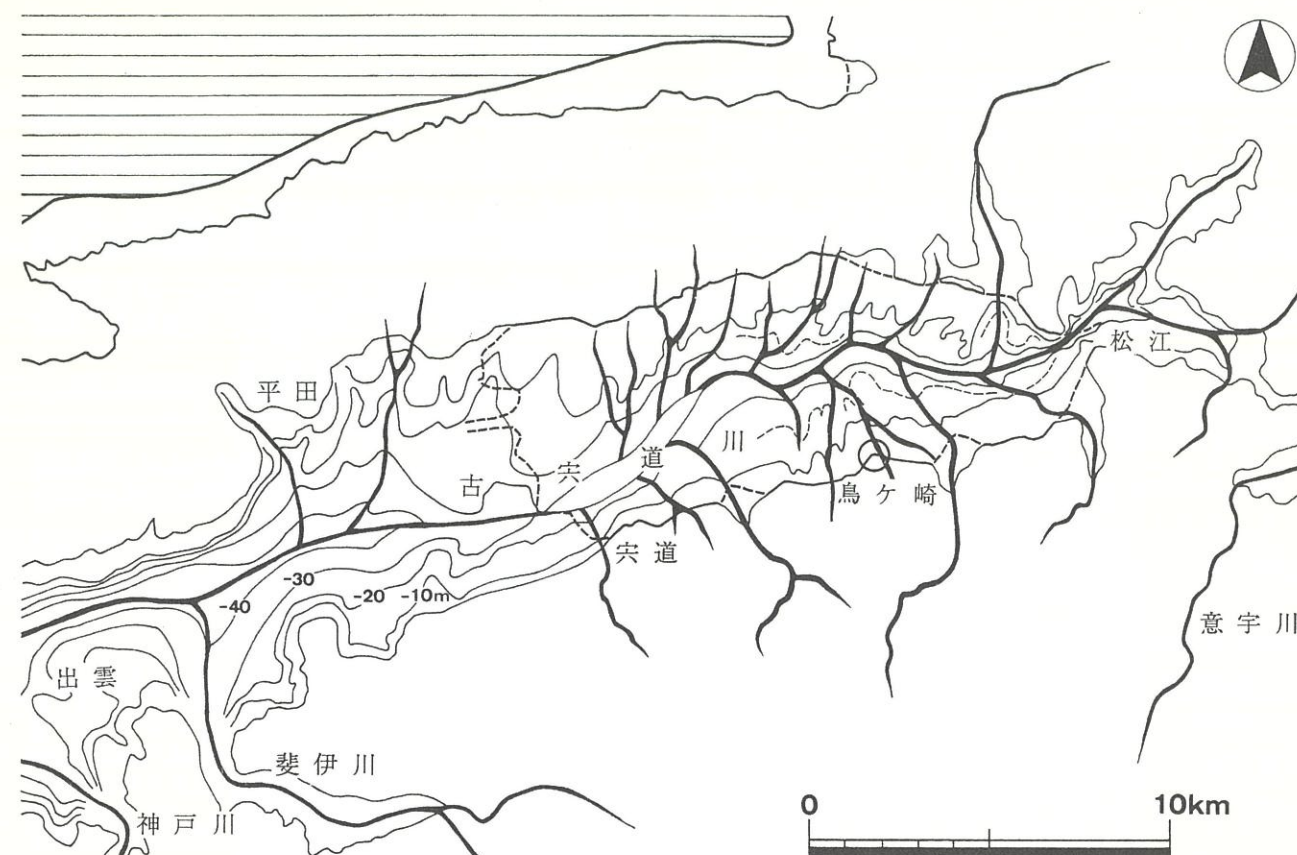


図3. 宍道湖周辺における完新統基底面の古地形復元図(徳岡・大西ほか, 1990を一部改変)
Fig.3 Reconstruction map of palaeotopography at the beginning of the Holocene epoch around Lake Shinji

名称はつけられていないが段丘面といえるものである^{註4)}が、旧石器時代においてはこれらは現状に近い形で存在していたと考えられる。(2)の標高0m前後の平坦面については、湖岸には一部新第三系中新統布志名層が露出しており波浪で侵食されているようである。この平坦面にどのくらい更新統の堆積物がのこされているかは明らかでないが、(2)の面については旧石器時代以降の地形改変を考慮しておかなければならない^{註5)}。

旧石器時代における鳥ヶ崎遺跡周辺の地形については、微地形において一部のちの地形改変のため不明な部分はあるが、北に広がる谷筋を見おろす諸段丘の一带に立地する景観であったと考えられる。

採集資料

玄武岩製角錐状石器(図4, 図版2)。長さ6cm, 幅2.7cm, 厚さ1.8cm, 重さ20.75gである。資料は

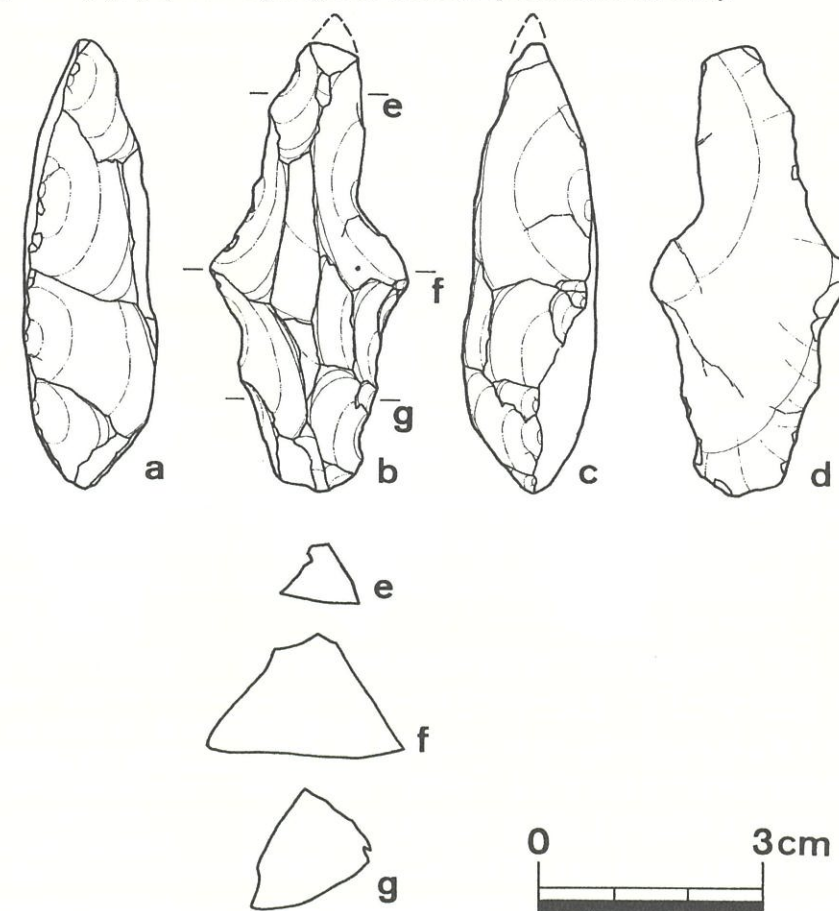


図4. 鳥ヶ崎遺跡採集石器
Fig.4 Lithic found at Torigasaki site

長年波に洗われたためか、全体に磨滅している。また、石器剥離面の風化の程度がおおよそ2つにわかれており、大半の剥離面には気泡状の孔が沢山あいているのが認められるが、縁辺の小剥離面には気泡状の孔が認められず表面が平滑なものがある。後者は、実測図ではリングをいれていない面があたり、これは風化色は前者より新しく、おそらくこれは二次的に自然の営力で形成されたものであろう。なお石材の玄武岩は、新第三系中新統の松江層などにふくまれているもので、比較的近隣で入手できるものようである。

分厚い剥片を素材としており、主要剥離面側からブラント加工を施し成形している。成形加工は粗めであり、僅かのブラント加工で目的の形態に仕上げられており、石器中央部が両側に突き出す特徴的な形態を呈している。なお、石器背面中央には主要剥離面と平行な2面の剥離面がみられるが、これは素材剥片背面の剥離痕かもしれない。また、d面が素材剥片主要剥離面であるが、図でみて下半がヒンジフラクチャー状となっている。

まとめ

今回採集した資料は、定型的石器であり、人工品であることは疑う余地がないものである。角錐状石器という形態からみて、後期旧石器時代のナイフ形石器文化期後半(21,000~14,000B.P.)に属するものと考えられる。この資料は、前期旧石器といわれる玉髄、瑪瑙資料の議論とは直接関わるものではなく、玉髄、瑪瑙資料が人工品であることの決め手になるものではないことは言うまでもない。また、今回の採集資料は角錐状石器1点のため、石器群の内容やどのような経緯でこの地点に石器がのこされたのかなどの問題については明らかではない。しかし、今回の発見で鳥ヶ崎一帯が後期旧石器時代の人類活動の場であったことが確かめられ、前期旧石器時代においても人類活動の場であり得た可能性が強まったといえることができるであろう。

最近、鳥ヶ崎遺跡では、段丘上の地点が公園化に伴う造成工事により、重機で削平されており、ほぼ造成工事も終わっている。なお、この地点は、事前に発掘調査がおこなわれている。丹羽野 裕氏や湯村 功氏をふくめわたしたちは、削平面に火山灰層が整然と堆積しているため、踏査をおこない石器の採集を試みたが、今のところ石器は得られていない。今回は、前期旧石器の問題には立ち入ることはできなかったが、今後フィールドワークをとおして、出

雲の前期旧石器について考えていきたい。

本校を作成するにあたっては、石器認定、資料収集などの面で次のかたがたにお世話いただいた。お名前をしるし篤くお礼申し上げます。

稲田孝司、大西郁夫、恩田 清、勝部 衛、片岡詩子、高須 晃、澤田順弘、高安克己、田中義昭、丹羽野 裕、林 正久、松沢亜生、松藤和人、藤野次史、湯村 功、渡辺貞幸。

註

- 1) なお前掲の片岡氏のほかに丹羽野氏、湯村氏が、出雲産前期旧石器の問題をとりあげている(丹羽野, 1991, 1993; 丹羽野・湯村, 1993; 湯村1992)。
- 2) 小野が紹介した時点では、松沢論文地区区分のⅡ地点とⅢ地点を第Ⅱ地区とし、Ⅳ地点が第Ⅲ地区となっている。
- 3) また、多量の土砂の流出の背景にたたら製鉄に伴うかなな流しがあることを多くの方が指摘している。
- 4) 島根大学理学部大西郁夫先生のご教示による。
- 5) 大西によると、(1)と(3)の段丘の間のつながり方がまだはっきりしていないという。(2)の平坦面については、縄文海進に伴い形成された可能性があるという。また、島根大学教育学部林 正久先生のご教示では、(2)の平坦面には、縄文海進によって形成されたと考えられる砂州が認められるという。
- 6) 石材については、島根大学理学部澤田順弘先生のご教示による。

引用文献

- 後藤慎二・中海宍道湖自然史研究会(1988)中海・宍道湖の自然史研究—その7.音響探査による中海・宍道湖の湖底堆積層と完新統基底面高度分布—。島根大学地質学研究報告, 7:13-23.
- 稲田孝司(1992)出雲地方玉髄・メノウ製石器研究の動向。考古学研究, 39-2:115-124.
- 片岡詩子(1991)鳥根県の「旧石器文化」事情。八雲立つ風土記の丘, 105:2-9.
- 松沢亜生(1991)自然為と人為の狭間で「鳥ヶ崎遺跡の石器」を考える。八雲立つ風土記の丘, 111:2-9.
- 松沢亜生(1992)鳥根・鳥ヶ崎遺跡他採集の石器類—剥離面の人為, 自然為の検討資料として—。旧石器考古学, 44:47-54.
- 松沢亜生(1992)鳥根・鳥ヶ崎遺跡他採集の石器類—剥離面の人為, 自然為の検討資料として(2)—。旧石器考古学, 45:47-54.
- 松沢亜生(1993)鳥根・鳥ヶ崎遺跡他採集の石器類—剥離面の人為, 自然為の検討資料として(3)—。旧石器考古学, 46:55-62.
- 松沢亜生(1993)鳥根・鳥ヶ崎遺跡他採集の石器類—剥離面の人為, 自然為の検討資料として(4)—。旧石器考古学, 47:47-60.
- 三梨 昂・徳岡隆夫編(1988)中海・宍道湖 地形・底質・自然史アトラス。山陰地域研究総合センター, 松江, 115p.
- 大西郁夫(1983)宍道湖南岸の第四系。続/山陰地学ハイキング。たたら書房, 米子:177-185.
- 大西郁夫(1987)中海・宍道湖周辺地域。日本の地質7中国地方。共立出版社, 東京:142-145.
- 大西郁夫・松田志朗(1985)出雲海岸平野下の第四紀堆積物。山陰地域研究(自然環境), 1:51-60.

- 小野忠熙(1977)鳥ヶ崎遺跡の旧石器文化—島根県玉湯町鳥ヶ崎遺跡の予察—。山口大学教育学部研究論叢, 26-1:1-22.
- 丹羽野 裕(1991)鳥根県における旧石器時代研究の現状と課題—宍道湖周辺地域を中心に—。鳥根考古学会誌, 8:57-66.
- 丹羽野 裕(1993)「出雲産前期旧石器」をめぐる諸問題。季

刊文化財, 77:1-6.

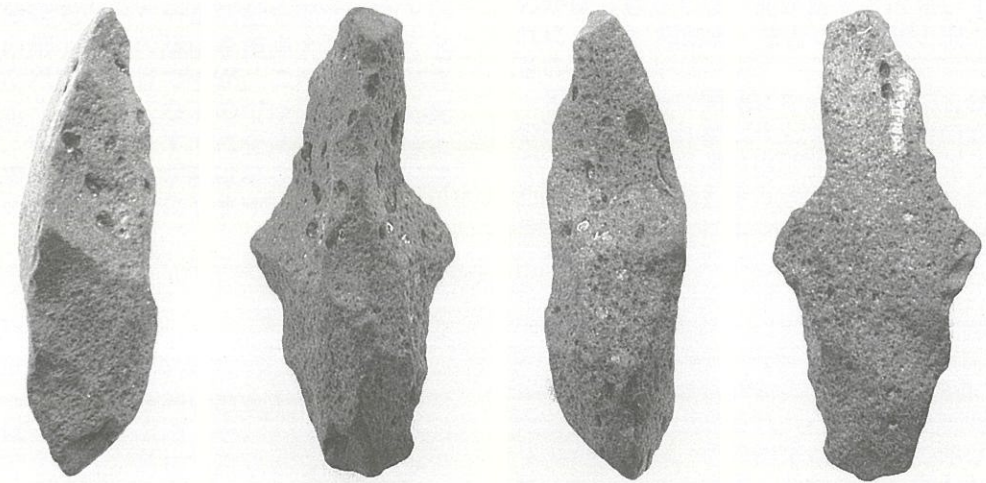
丹羽野 裕・湯村 功(1993)八雲村空山遺跡採集の石器について。鳥根考古学会誌, 10:143-151.

徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己ほか(1990)中海・宍道湖の地史と環境変化。地質学論集, 36:15-34.

湯村 功(1992)鳥根県内の旧石器時代・縄文時代草創期資料について。旧石器考古学, 44:85-106.



図版1. 石器採集地の状況(矢印が石器)
Plate 1. Occurrence of the lithic (arrow)



図版2. 鳥ヶ崎遺跡採集石器
Plate 2. Lithic found at Torigasaki site